



寄贈したヨットと「再会」した高橋航さん（右）と三浦啓花さん。国体を成功させた関係者に敬意を示した=5日、宮古市神林・リアスハーバー宮古

支援のヨットと「再会」

セーリング和歌山・高橋監督 福島出身

震災後宮古に寄贈 「同じ東北人、前へ」

岩手国体セーリング競技最終日の5日、和歌山県の少年監督高橋航さん(33)は、東日本大震災後に宮古市内の高校に寄贈したFJ級ヨットと「再会」した。宮古高出身で和歌山大3年生だった三浦啓花さん(26)の支援要請に応えた絆のヨット。再建したハーバーで開いた国体が成功し、福島県出身の高橋さんは「同じ東北人の強さを実感した」と、大会関係者に敬意と感謝を示した。

2011年5月以来の訪らっている」と喜んだ。問となった高橋さんは、三浦さんのヨットの寄贈は、三浦さんと宮古市神林のリアスが震災1カ月後の4月中スハーバー宮古の艇庫裏でヨットを確認。現在、国体に練習環境を失った高校などではFJ級の競技がないが、船は宮古高の生徒から始まった。賛同の輪が練習用に使用しており、高広がり、同県立星林高ヨットさんは「丁寧に使ってもト部顧問だった高橋さんや

三浦さんらから5月に同市を訪れて船を届けた。三浦さんは「艇庫が骨組みだけとなり、衝撃的だった」と当時を振り返り、「いろいろな人の助けがあつて国体が開かれ、無事にレースができた」と、競技役員としてほっとした表情を浮かべた。

道中で、崩落した橋や流木など台風10号豪雨の爪痕を目にした高橋さん。震災では高校時代の練習会場が壊滅的な被害を受け、競技環境を失う思いを共有しているからこそ、国体開催にこぎ着けた関係者や住民に心を寄せる。

高橋さんは「復興は進んだと思うが、津波の恐怖を抱えながら生活していると思う。強い精神力で困難な状況を感じさせない姿勢は見習わないといけない。これからも前に進む姿を見せてほしい」とエールを送った。

県ヨット連盟の榎頭治会長は「全国からの支援に対する感謝の国体だった。岩手のヨットの灯が消えていないことが分かってもらえたと思う」と復興国体の成果を強調した。

(2016年10月6日付)

1. 文章中の傍線Aの震災当時の三浦哲花さんが支援要請した時の気持ちを考えてみましょう。

.....

.....

.....

2. 文章中の傍線Bの高橋航さんの言葉を読み、どのように感じましたか。あなたの考えを書きましょう。

.....

.....

.....

3. この記事を読んで、岩手国体など全国から人々が集まる大会やイベントは、開催地や全国から参加する人々にとって、どのような意義があると考えますか。あなたの考えを書きましょう。

.....

.....

.....

年 組 名前